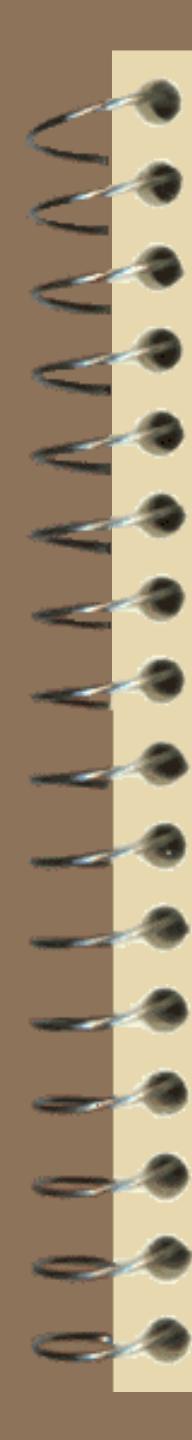


インテリジェンス研究における記号学(論)的アプローチの  
可能性と課題—米国情報局(USIA)の組織アイデンティティ  
の分析を通じて—

平松純一

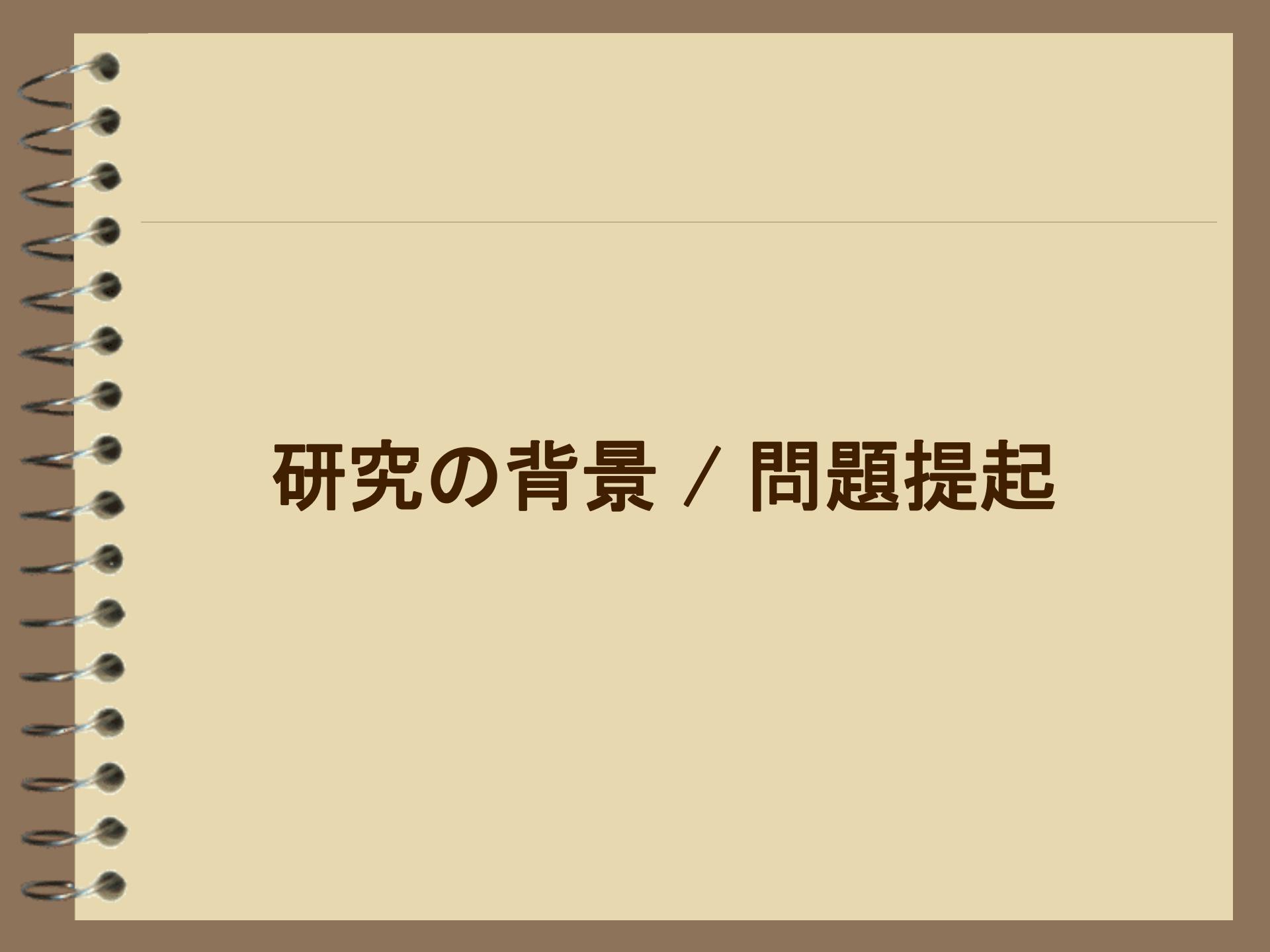
平成25年12月21日  
NPO法人インテリジェンス研究所  
第5回 諜報研究会



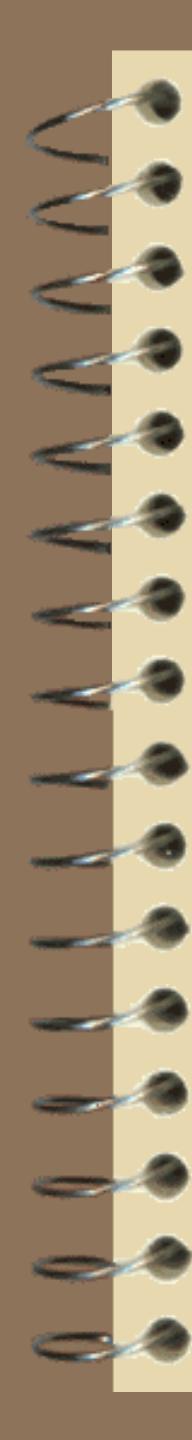
# 報告構成

---

- 研究の背景 / 問題提起
- 理論的枠組 / データと分析方法
- 調査結果
- 記号学的アプローチの意義と可能性
- 研究上の課題



# 研究の背景 / 問題提起



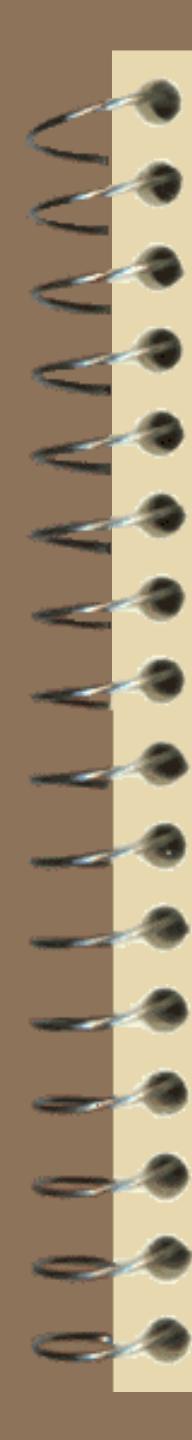
# 現在のインテリジェンス研究の問題点

---

- インテリジェンス(intelligence)定義の乱立状態
- 論者・研究者中心のインテリジェンス研究
  - 国や組織の社会歴史的文脈・違いが十分に考慮されているか？
    - 「intelligence」という語を多様な社会の現場の視点から見直す必要
    - 「**What** is intelligence?」から「**How** do different countries and institutions **define** intelligence?」へ(Davies, 2009)

# 新たなインテリジェンス研究の視角を求めて

- 経営学(と記号学)的に一国の組織単位でインテリジェンスの意味を考える
  - インテリジェンスを扱う組織を学ぶアプローチ(中西, 2011; Grey, 2012)
  - “Intelligence is organization”(Kent, 1951)
- ただし、経営学は学際的で、存在論、認識論、人間性、方法論の点で多様性
  - 本発表は、組織単位でのインテリジェンスの意味を考察するため、ソシュール記号学の知見を活用して、米国情報局(USIA)の組織アイデンティティを分析する
    - なお、社会的構成主義者による組織研究は、人間・組織の言語的、文化的、シンボリックな側面に注目する
    - 経営学では長い間、組織の構造・設計問題と、文化・シンボルの問題は切り離された研究がなされてきた(Alvesson and Willmott, 2002)



---

# 理論的枠組 / データと分析方法

# 組織アイデンティティ

## ■ 定義と意義

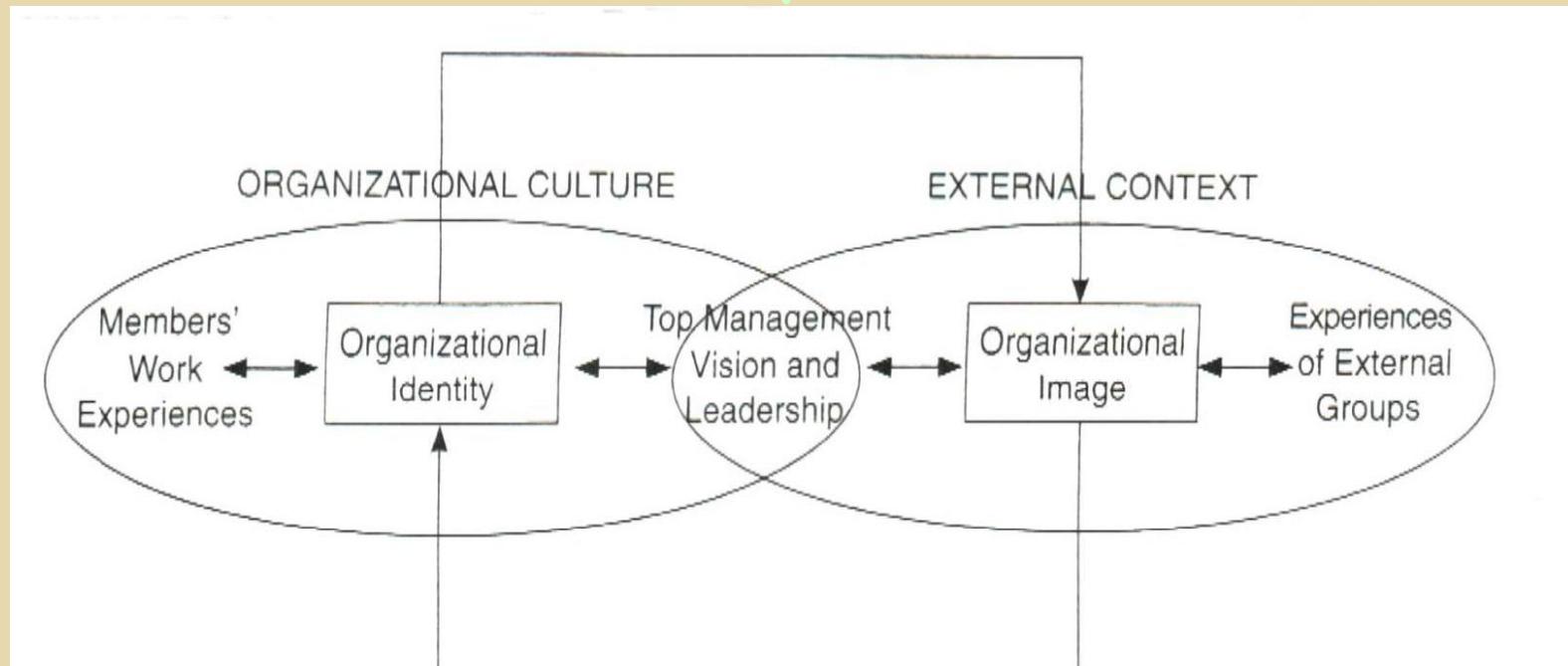
- “組織としての我々は誰なのか？”
- 初期の研究では、組織の「中心的、持続的、独特の」特徴 (Albert and Whetten, 1985)
  - ただし近年では、組織アイデンティティの複合性、対立・矛盾、環境・時代に応じた変化を指摘する論者も (Kenny, Whittle and Willmott, 2011)
- 組織アイデンティティは、組織としての振舞い方、他組織との相違形成に影響
- 職業上の境界を考える上でも組織アイデンティティは中心的役割 (Alvesson and Willmott, 2002)

## ■ 社会的構成主義者は、組織アイデンティティを直接観察することはできないと考える

- よって、特定の文脈下における、アクターによる意味づけの過程から考えて→言語的実践(パロール、ディスコース)分析へ
- 組織アイデンティティと組織イメージの相互依存・影響関係の指摘 (Gioia, Schultz, and Corley, 2000)

# 組織アイデンティティの動的形成

この過程の中で、組織独自の記号も形成・変化する



出典: Kenny, Whittle and Willmott (2011, p.131)

# 記号学(論)(semiology/semiotics)

## ■ 記号学(論)とは

- 「人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義—その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み替えていくか—」を考える研究分野(池上, 1995)
- 「記号現象」は、あるもの(記号表現)が他のあるもの(記号内容、対象)の代わりとしてそれを表わす、ことで生じる

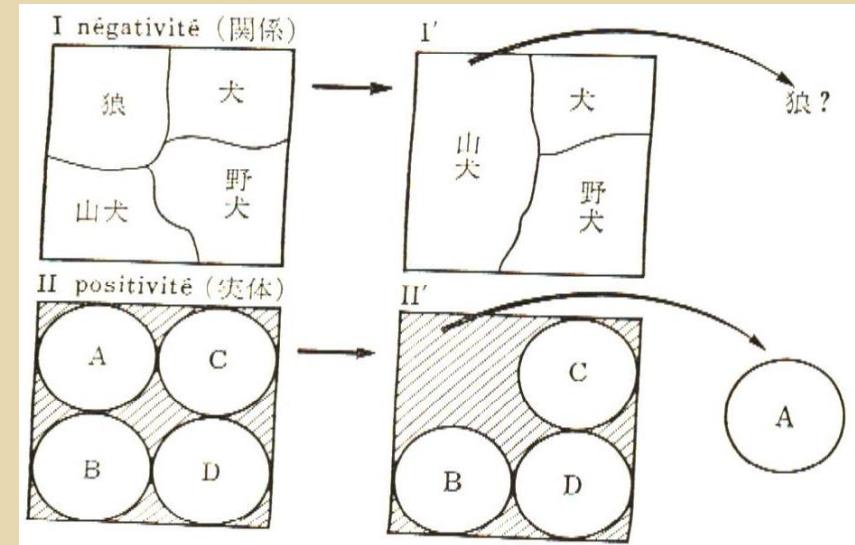
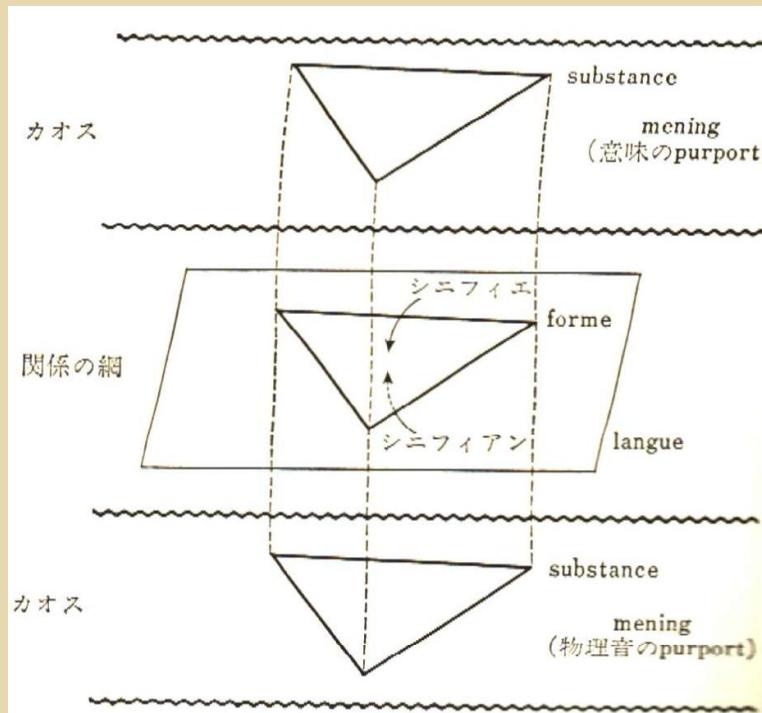
## ■ さまざまな学派の存在(cf. Saussure, 1916; Peirce, 1931; Morris, 1938; Eco, 1976)

- 組織論の先行研究としてはパース記号論を発展させたStamper(2000)らの研究があるが、機能構造主義的で、グランド・セオリー志向

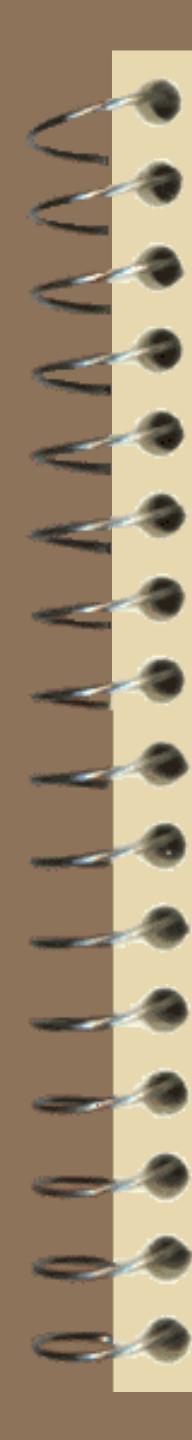
# ソシユール記号学(semiology)の特徴 1

- 言語記号の特殊性・重要性
  - 他的一切の記号との違いは、非記号性からの出発
    - 個々の単語と対象に必然性はなく、それだけでは何も意味しない
  - 言語記号は、社会的歴史的に作られる(恣意性)
    - 組織も、言語的枠組みを通して実現・理解される
- 実体から関係へ
  - 関係そのものが、事物と意味を作る
  - ある人間・現象を知ることというのは、それが他のものと保っている関係の網を知ること
- 言語能力(ランガージュ)、言語体系(ラング)、言語実践(パロール)の並存・相互依存
  - 関係(=布置)はラングに属し、関係樹立活動(布置化)はパロールの次元にある
  - パロールによって新たな意味が生まれるが、意味はラングの価値体系を参照

# ソシユール記号学(semiology)の特徴 2



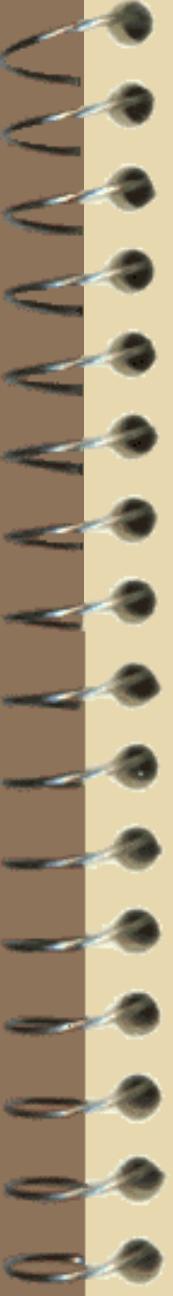
出典：丸山 (1985, pp.9, 21)



# データと分析方法

---

- 以上の理論的枠組みに基づいて、米国情報局(USIA)に関する組織内外のアクターが生み出す言語データから、USIAがどのように組織アイデンティティを形成・維持・変化させていくのかを分析
  - 特に、USIAが自己のアイデンティティ形成において、「intelligence」をどのように捉えていたかに注目
  - 組織アイデンティティと組織イメージとの関係・動的形成を仮定
  - データは、任務規定、規則・規範、通信、報告書、広告、報道資料などを使用(Soenen and Moingeon, 2002)



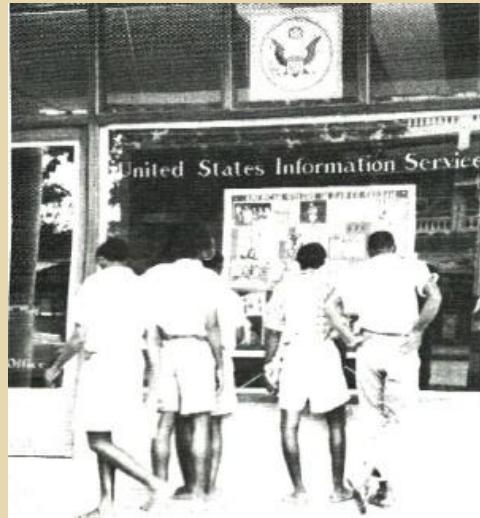
---

# 調査結果

# 米国情報局(USIA)の概要

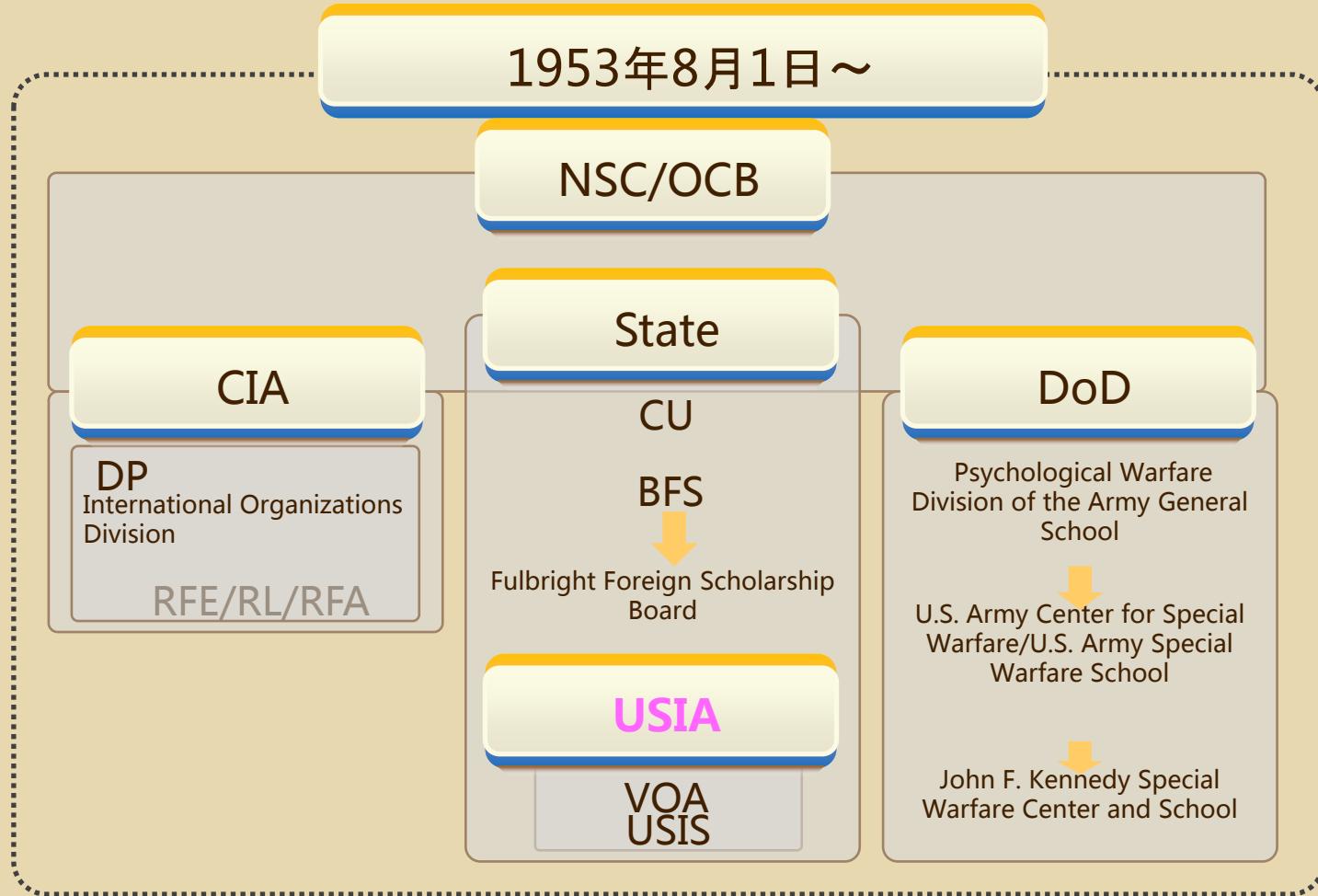
- 存続期間： 1953年8月1日～1999年10月1日
- 米国史上初の平時かつ公然の情報機関、組織内には調査局も
- 国務省からの指針を受け、ラジオ放送(Voice of America, VOA)、図書館運営、出版、国際交流などを実施
  - 各国に支局(United States Information Service, USIS)
- 60年代半ばより「propaganda」の代わりに「public diplomacy」
- 1965年、ベトナム・サイゴンに米国統合パブリック・アフェアーズ局(JUSPAO)を設立
  - 初めて、USIA長官直属の部下が民事・軍事を統合した情報作戦を実施
- カーター政権時の1978年、International Communication Agency (ICA, USICA)と名称変更
  - 「information」がフランスなどで諜報と誤解される可能性
  - レーガン政権(1981年)以降、USIAに戻る

# USISの活動



出典: Henderson(1969, pp.117, 121) 出典: Kendall(2003, pp.63, 67-8)

# 「propaganda」を扱う省庁

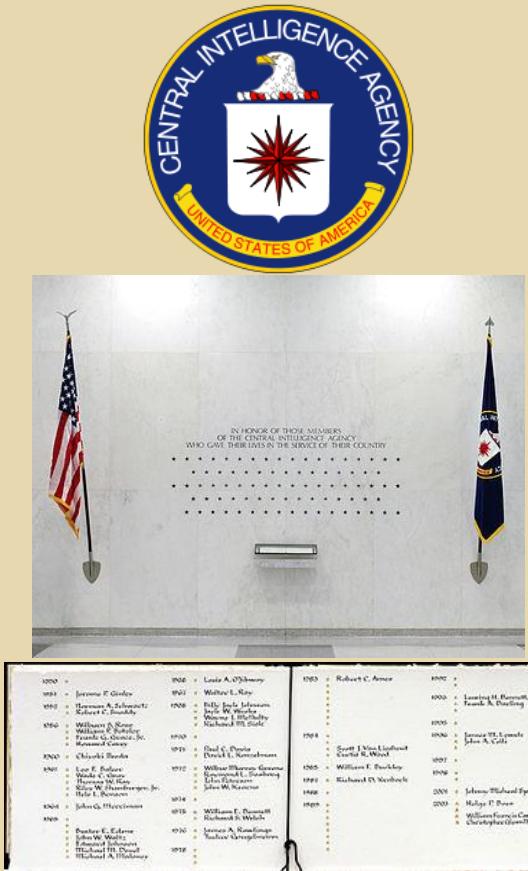


# 公然情報機関USIAと非公然情報機関CIA



NAME	COUNTRY OF DEATH	YEAR	NAME	COUNTRY OF DEATH	YEAR
Kamsmi bin Rosian	Singapore	1950	Benoit Iyomaga	Cameroun	1973
Jack C. Andrew	Vietnam	1955	Wayne A. Wilcox	England	1974
Francis P. Corrigan	Laos	1961	Everly Driscoll	Kenya	1981
William H. Lewis	Ghana	1963	Virginia I. Warfield	India	1983
Takao Sato	Japan	1965	Riyad G. Abdul-Mashif	Lebanon	1983
Helen Kelly	Somalia	1966	Hasan M. Assaran	Lebanon	1983
Leonardo C. de Azevedo	Brazil	1967	Edgard J. Kheri	Lebanon	1983
John R. MacLean	Laos	1967	Rabinder Nath Khanna	India	1983
Stephen H. Miller	Vietnam	1968	Barbara J. Allen	Kenya	1986
Wimon Siddhipranee	Thailand	1970	Mathew Mwikoni	Tanzania	1988
Mana Smithapindhe	Thailand	1970	Dallas H. Cox	United States	1990
Prasert Wasthakarn	Thailand	1970	Rachel M. Pussy	Kenya	1998
Charles D. Seales	Kenya	1970			

出典: United States Information Agency Public Liaison Office (1999, p.3)



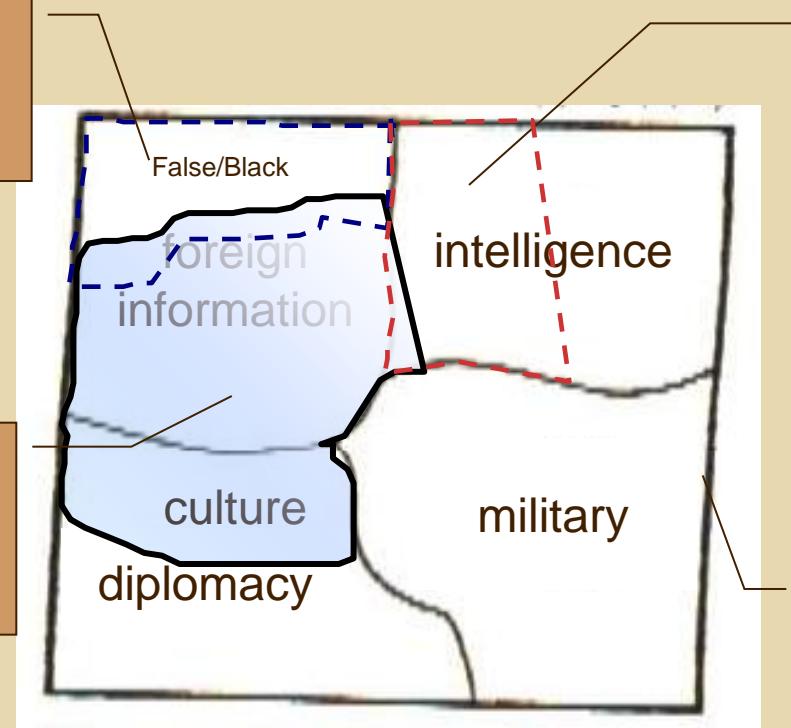
# USIAの言語記号関係

USIAの考える  
intelligenceの  
propaganda

USIAの考える  
USIAの  
propaganda

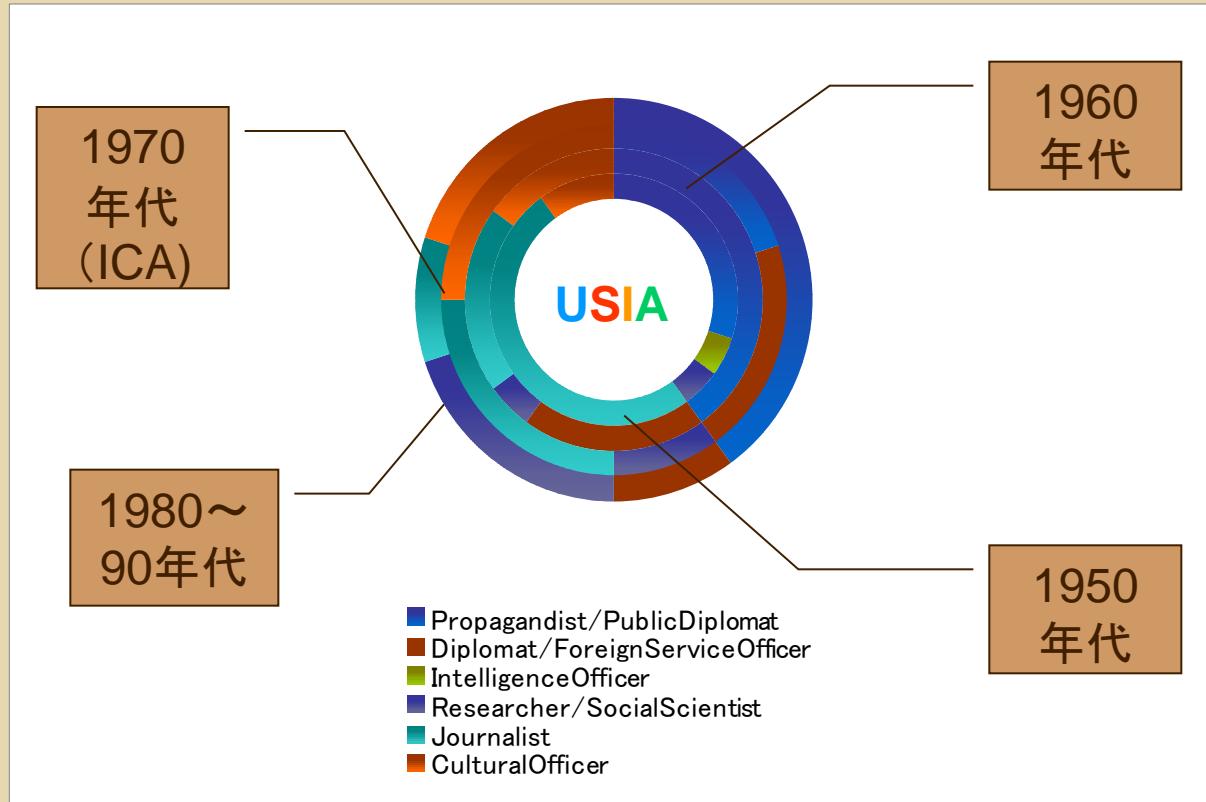
USIAの考える  
research/social  
science

米国における一般的  
な言語構造

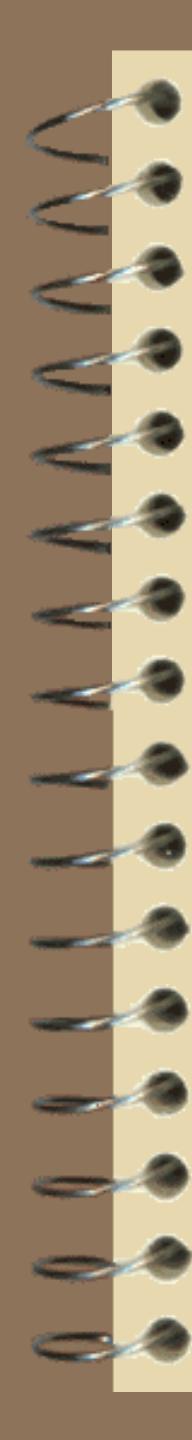


組織アイデンティティ形成過程の中で、USIA独自の記号現象

# USIAの組織アイデンティティ構成要素



アイデンティティ構成要素が時代変化、インテリジェンス幹部排除



# 調査結果のまとめ

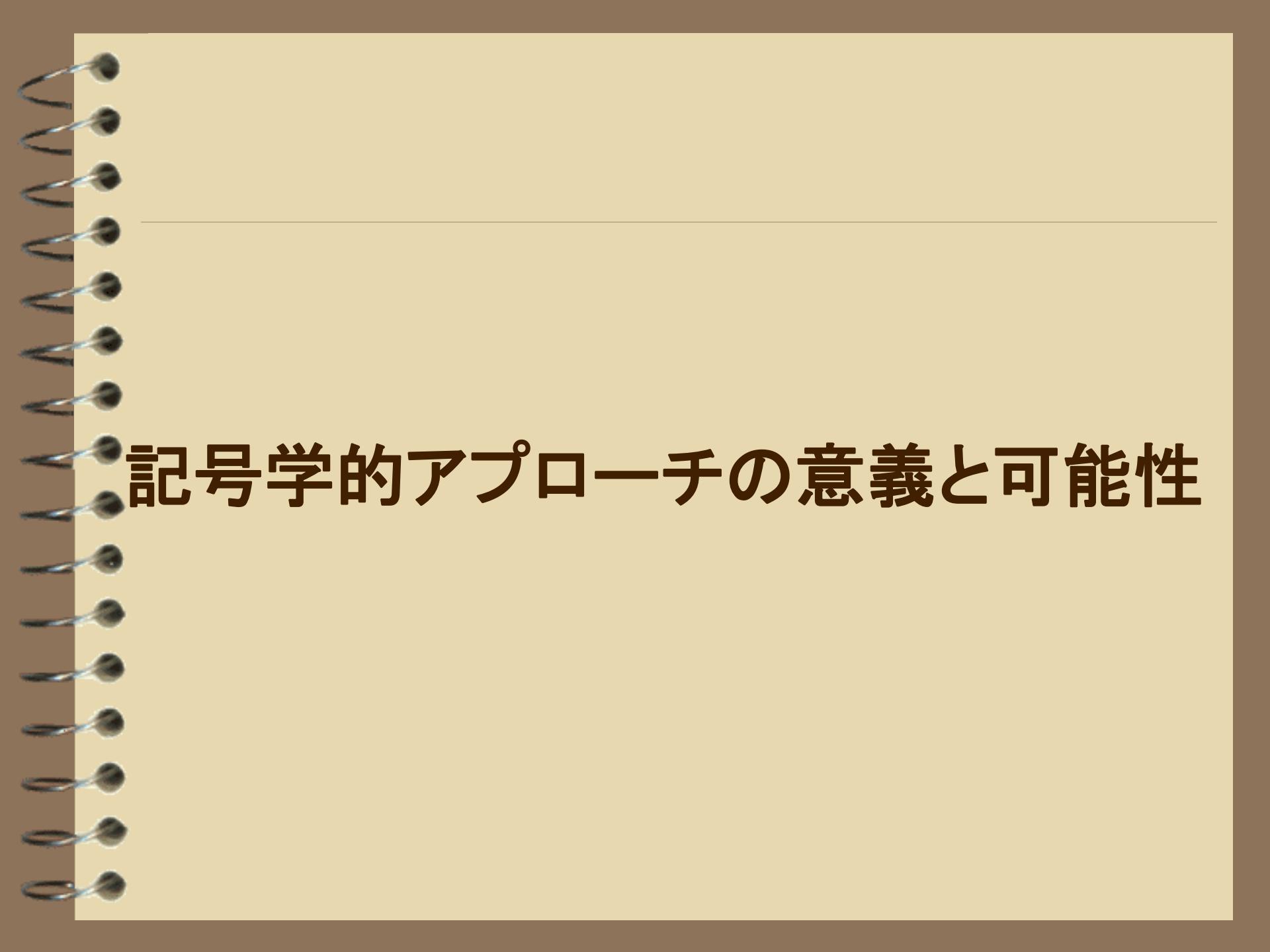
---

## ■ USIAにとっての記号「intelligence」

- 当初は**情報**に関する意味と漠然と理解、次第に国家の**秘密情報活動**を行う機能・組織を示すものとして認識
  - CIAはUSIAとは異なるプロパガンダ(black propaganda)の担い手
  - いわゆる「OSINT」面での評価は見られない
- ICの参加・協力拒否、東側諸国にCIAと同視された経験から、「intelligence」にネガティブなイメージも持つ(意味の墮落)

## ■ USIAの組織アイデンティティ

- 組織内外のアクター(CIA、DoD、State、メディアなど)との関係・やりとりの中で、構成要素の力点が変化
- 特に「intelligence officer」→「(social science) researcher」
  - 人事においては、元CIA職員やCIAのカバーを積極的に排除



# 記号学的アプローチの意義と可能性

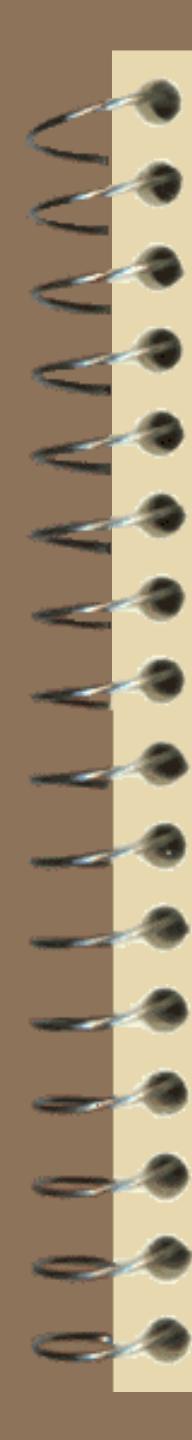
# 記号学的アプローチの意義と可能性

- 国だけでなく、組織などの多様な社会ごとに言語記号「intelligence」の捉え方が異なること、その形成・変化の過程が理解できる
  - 「intelligence」が情報の収集・分析・配布・評価(いわゆるインテリジェンス・サイクル)だけを意味するとは限らない
- 各国の歴史的・社会的文脈の中で、「intelligence」の意味は常に変化の可能性を秘めている
  - 他の言語記号・社会との関係の中で考えていくことが大切
  - 組織では自己のアイデンティティ形成との関係で、独自の記号解釈
  - ただし、組織が生み出す記号は、ソシュールの考えとは異なり、必ずしも排他的差異とはならない(cf. グレー・プロパガンダ)
- 応用可能性
  - 比較研究
    - 各国の言語体系で用いられる「intelligence」、「諜報」、「renseignement」、「inteligencia」の意味は？それは具体的文脈でどのように変化していくのか？
  - 情報分析技術の研究
    - アナリストごとの記号の捉え方に違いはあるか？どのように違うのか？
    - cf. Knowledge Representation in Neural Systems (KRNS) program



---

# 研究上の課題



# 研究上の課題

---

- 一次資料の充実

- 過去の組織研究ではインタビューが難しく、二次資料依存傾向
    - 具体的には、USIA調査室、グレー・プロパガンダ、CIA・ICとUSIAの折衝に関する資料

- 記号学(論)の多様性

- 他の学派からUSIAはどのように説明されるか？
  - 他の記号との関係
    - 例えば、写真、音声、動画、儀式など

ご清聴ありがとうございました